

目次

はしがき	ix
第1章 ラレル受動文(第1部)：その使用の実態	1
1.1 受動文とは何か?	1
1.2 ラレル受動文の使用頻度上昇と使用範囲拡大	2
1.3 滑稽なラレル受動文	5
1.4 意味が不自然なラレル受動文	7
1.5 誤解を招くラレル受動文	17
1.5.1 はじめに	17
1.5.2 誤解の原因(1)：意図、目的、動機、判断、予定、積極性、決定権、義務、責任など	17
1.5.3 誤解の原因(2)：迷惑、被害	18
1.5.4 誤解の原因(3)：「ラレルのねじれ」	22
1.5.4.1 はじめに	22
1.5.4.2 ラレルのねじれ(その1)： 自動詞 + 他動詞ラレル	22
1.5.4.3 ラレルのねじれ(その2)： 他動詞 + 他動詞ラレル	23
1.5.4.4 ラレルのねじれ(その3)： 他動詞ラレル + 自動詞	29
1.5.4.5 ラレルのねじれ(その4)： 他動詞ラレル + 他動詞	29
1.5.4.6 ラレルのねじれ(その5)： 他動詞ラレル + 他動詞ラレル	31
1.5.5 誤解の原因：まとめ	33
1.6 文の流れを悪くするラレル受動文	34
1.6.1 はじめに	34
1.6.2 自動詞 + 他動詞ラレル	34

1.6.3	他動詞 + 他動詞ラレル	36
1.6.4	文の流れを悪くするラレル受動文：まとめ	38
1.7	文を分かりにくくするラレル受動文	40
1.8	締まりの無い文にするラレル受動文	41
1.9	無責任に聞こえるラレル受動文	46
1.10	他人事に聞こえるラレル受動文	47
1.11	ラレル動詞の使用そのものに違和感を覚えるラレル受動文	51
1.12	私の日本語では自動詞を使うところでラレル動詞を 使った場合	55
1.13	私の日本語ではラレル動詞が存在しない場合	57
1.14	第1章、ラレル受動文(第1部)のまとめ	58
第2章	ラレル受動文(第2部)：なぜ、ラレル受動文を使うか？	59
2.1	はじめに	59
2.2	無標と有標	59
2.3	ラレル受動文の不思議な用法の例の追加	61
2.4	ラレル受動文の使用に規則性はあるか？	62
2.4.1	はじめに	62
2.4.2	一つ段落の中	64
2.4.3	段落が二つ以上続く場合	66
2.4.4	記事とその見出し	68
2.4.5	記事と写真の説明	71
2.4.6	異なる記者が同じ出来事について書いた(と思われる) もの	73
2.4.7	「ラレル受動文の使用に規則性はあるか？」のまとめ	77
2.5	ラレル受動文は客観的か？おしゃれか？飾りかもしれない。	78
2.5.1	はじめに	78
2.5.2	ラレル受動文は客観的か？	78
2.5.3	ラレル受動文はおしゃれか？	80
2.5.4	ラレル受動文は飾りかもしれない。	82
2.6	第2章、ラレル受動文(第2部)のまとめ	84

第3章	ラレル受動文(第3部)：文法の変化	87
3.1	はじめに	87
3.2	日本語の連体修飾節：フィリピン海プレートに乗って南下し、 フィリピンを通り過ぎて、マダガスカルに達する？	87
3.3	主語「が」欲しい？	92
3.4	ラレル受動文の中の「を」と「が」： 「疑いを持たれる」と「疑いが持たれる」	97
3.4.1	はじめに	97
3.4.2	「が」を使った例	97
3.4.3	なぜ「が」は不自然なのだろうか？	99
3.4.4	記事またはその見出しまたは写真の説明の中	102
3.4.5	「疑いを持たれる」と「疑いが持たれる」	105
3.5	「泥棒が逮捕！」：能動態と受動態が中和している？	108
3.5.1	はじめに	108
3.5.2	能動態と受動態の中和とは？	108
3.5.3	能動態と受動態の中和の例	109
3.6	副詞句などが修飾する範囲	121
3.7	ラレル動詞が自動詞の代わり	125
3.7.1	はじめに	125
3.7.2	自動詞が無い場合、ラレル動詞がその代わりをする ということ	125
3.7.3	或る種のラレル動詞は自動詞と見なすべきである ということ	127
3.7.4	「失う」(他動詞、能動)、「失われる」 (ラレル動詞、受動)と「失われる」(自動詞)	130
3.7.4.1	はじめに	130
3.7.4.2	理由1と理由2：「失われる」という 言い方の存在	130
3.7.4.3	理由3：「失われる」の不思議な使い方	131
3.7.4.4	理由4：「失う」(他動詞、能動)、「失われる」 (ラレル動詞、受動)、「失われる」(自動詞)の 三つの用法の併存	134

3.8	ラレル受動文の今後の予測	139
3.8.1	はじめに	139
3.8.2	能動文とラレル受動文の対応関係	140
3.8.2.1	はじめに	140
3.8.2.2	能動文とラレル受動文の対応： 標準的な対応	140
3.8.2.3	能動文とラレル受動文の対応： 非標準的な対応(その1)	141
3.8.2.4	能動文とラレル受動文の対応： 非標準的な対応(その2)	144
3.8.2.5	能動文とラレル受動文の対応： 非標準的な対応(その3)	145
3.8.2.6	能動文とラレル受動文の対応： 非標準的な対応のまとめ	146
3.8.2.7	ラレル受動文は今後どうなる？	148
3.9	第3章、ラレル受動文(第3部)のまとめ	149
第4章	テアル受動文	153
4.1	はじめに	153
4.2	テアル文も受動文である。	153
4.3	テアル受動文とラレル受動文の役割分担	157
4.4	テアル受動文：絶滅危惧種	158
4.5	「られている」と「てある」の合体	162
4.6	ラレテイル受動文：問題	163
4.6.1	はじめに	163
4.6.2	締まりが無い。	163
4.6.3	ラレルのねじれ	164
4.6.4	意味が誤解を招く場合と意味が不自然な場合	165
4.7	テアル受動文の背後に動作者がいる？	166
4.8	第4章、テアル受動文のまとめ	168

第5章	サセル文：使役文(第1部)：作り方と意味	171
5.1	はじめに	171
5.2	子音動詞、母音動詞、不規則動詞	172
5.3	自動詞文と他動詞文	173
5.4	自動詞と他動詞の対応(その1)	174
5.5	サセル動詞・使役動詞の作り方	176
5.6	使役文の構造	177
5.7	使役文あるいはサセル動詞の意味と用法の分類	178
5.8	「漢語+する」	182
5.9	自動詞と他動詞の対応(その2)	184
5.10	第5章、サセル文：使役文(第1部)のまとめ	187
第6章	サセル文：使役文(第2部)：変化	189
6.1	はじめに	189
6.2	「漢語+する、漢語+させる」と「英語+する、 英語+させる」	189
6.2.1	はじめに	189
6.2.2	自動詞と他動詞の両方の「漢語+する」と その「漢語+させる」	190
6.2.2.1	はじめに	190
6.2.2.2	「自動詞主語 = 他動詞目的語」の 対応の例	190
6.2.2.3	「自動詞主語 = 他動詞主語」の 対応の例	196
6.2.3	他動詞だけの「漢語+する」とその 「漢語+させる」	197
6.2.4	自動詞だけの「漢語+する」とその 「漢語+させる」(その1)	201
6.2.5	自動詞だけの「漢語+する」とその 「漢語+させる」(その2)	204
6.2.6	「着水する」と「着水させる」	210
6.2.7	「漢語+する」と「漢語+させる」のまとめ	213

6.3 「漢語+させる」の使役用法が消滅する？	215
6.4 元の文が無い使役文	219
6.4.1 はじめに	219
6.4.2 誘発使役(または本来の使役)	220
6.4.3 許容使役(または放任・許可の使役)	221
6.4.4 他動詞相当のサセル動詞	221
6.4.4.1 はじめに	221
6.4.4.2 対応する他動詞を持たない自動詞を 他動詞化する用法	221
6.4.4.3 他動詞がある場合に、自動詞のサセル形を 他動詞として用いる用法	222
6.4.4.4 他動詞がある場合に、他動詞のサセル形を 他動詞として用いる用法	223
6.4.4.5 「させる」を他動詞の印として用いる用法	224
6.4.4.6 無駄なサセル動詞	225
6.4.4.7 なぜ無駄なサセル動詞を使う？	239
6.5 サセル動詞ではない他動詞が消える？	242
6.6 第6章、サセル文：使役文(第2部)のまとめ	246
第7章 「楽しむ」：意味の変化の例	249
7.1 はじめに	249
7.2 人称について	249
7.3 日本語：動詞、形容詞と人称について	250
7.4 「楽しむ」の変化：その1	252
7.5 「楽しむ」の変化：その2	254
7.6 「楽しむ」の変化：その3	255
7.7 第7章、「楽しむ」のまとめ	261
第8章 本書のまとめ	263
参照文献	265
索引	267

第1章 ラレル受動文(第1部)： その使用の実態

1.1 受動文とは何か？

受動文とは一体何だろうか？ 詳細を語り始めると長くなってしまいます。ここでは、非常に簡単に、かつ、大まかに述べておく。

私が中学校と高校で習った英語の教科書では、受動文は能動文と対比して書いてあり、大体(1-1)と(1-2)のような形式で書いてあったと思う。私が作った例文も添える。

- (1-1) 能動文： 主語 動詞 目的語
 (1-2) 受動文： 主語 be + 過去分詞 by + 動作者
 (1-3) Mary scolded John.
 「メアリーがジョンを叱った。」
 (1-4) John was scolded by Mary.
 「ジョンがメアリーに叱られた。」

能動文と受動文は動詞の形、語順、前置詞の三つの点で異なる。受動文では動詞に「be + 過去分詞」が付く。能動文の目的語が受動文の主語になる。能動文の主語は、受動文では主語ではない。前置詞の by が付く。受動文では語順も変わる。

日本語の能動文の構造、受動文の構造、能動文と受動文の対応は、以下のよう示すことができる。これは日本語文法研究者の間で、一致した見解であろう。奥津(1982: 70-71)、高橋(2003: 134)など参照。(詳細を語り始めると長くなってしまいます。ここでは、非常に簡単に、かつ、大まかに述べておく。)

- (1-5) 能動文： Xが Yを する。
 主語 目的語
 (1-6) 受動文： Yが Xに られる。
 主語
 (1-7) 受動文： Yが Xから られる。
 主語

第2章 ラレル受動文(第2部)： なぜ、ラレル受動文を使うか？

2.1 はじめに

第1章で見たように、ラレル受動文の例には、私から見ておかしい文や間違った文が無数にある。ラレル受動文を使ったために、文が滑稽になったり、意味が不自然になったり、誤解を招いたり、ラレルのねじりが生じたり、文の流れが悪くなったり、文が分かりにくくなったり、締まりの無い文になったり、無責任に聞こえる文になったり、他人事に聞こえる文になったりする。私が「おい、おい。こんなところでラレルを使うなよ。ラレルを無闇に使うなよ。ラレルを大事にしろよ。大事な時に使えよ」と言いたくなる例が無数にある。ラレル受動文には立派な役目があるのに。このようなラレル文を使う人は大勢いる。なぜ、こんな変なラレル受動文を使うのであろうか？ 私にとっては不思議である。第2章では、なぜ、こんな変なラレル受動文を使うのか、探ってみよう。

2.2 無標と有標

言語学では、二つの表現を比べて「無標」と「有標」と言うことがある。大まかに言うと、二つの表現のうち、普通の言い方の方が無標であり、特別な言い方の方が有標である。無標と有標は、形の観点から言う場合もあり、意味・用法の観点から言う場合もある。

例えば、英語の単語の lion「ライオン」と lioness「雌ライオン」を比べてみよう。Lioness には女性または雌を表す接尾辞 -ess が付いているが、lion には付いていない。形の点で lion は無標であり、lioness は有標である。また、lioness は雌ライオンという、限定的な意味を持つ。一方、lion は限定が無い。ライオンを指す。雄ライオンの場合もあり、雌ライオンの場合もある。意味の点でも、lion は無標であり、lioness は有標である。

日本語の例を挙げる。「筆」と「絵筆」を比べてみよう。形の点では、「絵筆」には「絵」がついているが、「筆」にはついていない。従って、「筆」は無

第3章 ラレル受動文(第3部)： 文法の変化

3.1 はじめに

第1章では、ラレル受動文の例には(少なくとも私から見て)変な文や間違った文が無数にあることを見た。第2章では、なぜ、このようなラレル受動文を使うのか、探ってみた。第3章では、このようなラレル受動文を、文法の変化という観点から見る。

日本語でラレル受動文の頻度が上昇していることと、使用範囲が広がっていることは間違いのないであろう。更に、ラレル受動文に関連した文法現象でも変化がいくつか起こっている。ラレル受動文の頻度上昇・使用範囲拡大が原因でこれらの変化が起こっているのもであろう。逆に、これらの変化が起こったので、その結果、ラレル受動文の頻度上昇・使用範囲拡大が起こったという可能性も否定できないが。

以下ではこれらの変化を紹介する。実は、これらの変化の一つは既に述べた。2.5.4で述べた、ラレルは単なる飾りになっている場合があるということである。これ以外の変化もある。以下で紹介する。これらの変化には、以下の、一見相矛盾する傾向がある。

- (3-1) 傾向1：日本語は或る面では、主語中心の言語になりつつある、あるいは、主語を欲しがらる言語になりつつある。(3.2、3.3、3.4、3.5)
- (3-2) 傾向2：日本語は或る面では、主語中心ではない言語になりつつある。(3.6)

3.2 日本語の連体修飾節：フィリピン海プレートに乗って南下し、フィリピンを通り過ぎて、マダガスカルに達する？

以下で述べる現象は日本語が主語中心の言語になりつつある傾向の一つの現れである。(以下で述べることは、角田(2004)とTsunoda(2008)に発表した。)

やや大袈裟な言い方ではあるが、3.2の題が示すような現象が、今、日本語で

第4章 テアル受動文

4.1 はじめに

ここでテアル受動文と呼ぶのは以下のような文である。

- (4-1) 窓が開けてある。
- (4-2) 本が置いてある。
- (4-3) 木が植えてある。
- (4-4) 花が飾ってある。

第4章では、主に以下のことを述べる。

(a)従来の日本語文法研究では、このような文を受動文と呼ばなかったようだ。しかし、或る考えを用いれば、これらの文は受動文と呼べる。しかも、見事な受動文である。ラレル受動文よりもっと受動文らしい受動文である。

(b)ラレル受動文の使用範囲が拡大して、テアル受動文の領域に侵入して、テアル受動文を駆逐しかけている。テアル受動文は消滅の危機に瀕している。いわば、絶滅危惧種になっている。

(c)上記の(b)の結果であろうか、テアル受動文の使用法に混乱が生じている。

4.2 テアル文も受動文である。

第1章の1.1で、英語の受動文と能動文は、以下のように示すことができると述べた。私が作った例文も添える。

- (1-1) 能動文： 主語 動詞 目的語
- (1-2) 受動文： 主語 be + 過去分詞 by + 動作者
- (1-3) Mary scolded John.
「メアリーがジョンを叱った。」
- (1-4) John was scolded by Mary.
「ジョンがメアリーに叱られた。」

受動文では「by + 動作者」が動作者を示す。

同じく、第1章の1.1で、日本語の能動文と受動文は以下のように示すことができると述べた。

第5章 サセル文：使役文(第1部)： 作り方と意味

5.1 はじめに

第5章と第6章では使役文と呼ぶ文を扱う。使役文は「させる」の形を持つ動詞を持つ。このような動詞を文法の研究では使役動詞と呼ぶと思う。しかし、サセル動詞と呼ぶ方が便利な場合がある。(実は、「させる」が付いた動詞でも、厳密に言うと、使役の意味を持たないものがある。5.7で見ると、(h)他動詞相当のサセル動詞である。これらのサセル動詞は厳密な意味では使役動詞ではない。従って、サセル動詞は厳密な意味の使役動詞を含む。)

使役文の例は(5-2)、(5-3)、(5-5)である。対応する文も挙げる。(5-1)と(5-4)である。

- (5-1) 花子が 笑った。
- (5-2) 太郎が 花子を 笑わせた。
- (5-3) 太郎が 花子に 笑わせる。
- (5-4) 花子が 本を 読んだ。
- (5-5) 太郎が 花子に 本を 読ませた。

第1章、第2章、第3章で以下のことなどを見た。ラレル受動文の使用頻度が上昇して、使用範囲も拡大している。その結果、私から見て、違和感のある、あるいは、間違いであるラレル受動文が多数ある。ラレル動詞が、受動の意味が無く、単なる飾りのようにになっている場合がある。

使役文でも同様のことが起こっているようだ。使役文の使用頻度が上昇して、使用範囲も拡大しているようだ。その結果であろうか、私から見て、違和感のある、あるいは、間違いである使役文が多数ある。私から見て無駄なサセル動詞もある。

第5章では、まず、導入として、使役文の作り方と意味を見る。その準備として、様々な、関連事項を述べておく。第6章で、上の段落で挙げたことについて詳しく述べる。

第5章で述べることは、読者の皆様が学校の国語の授業で習ったこととは

第6章 サセル文：使役文(第2部)：変化

6.1 はじめに

5.1で述べたように、サセル使役文の使用頻度が上昇して、使用範囲も拡大しているようだ。その結果であろうか、サセル使役文に変化が起きている。私から見て、違和感のある、あるいは、間違いであるサセル使役文の例が多数ある。無駄なサセル動詞と呼べるものがある。サセル動詞の乱用であると言って良いくらいだ。第6章では、これらのことについて述べる。第5章では、第6章の準備として、サセル使役文の作り方と意味を見た。第6章でも、準備的なことも述べる場合がある。

6.2 「漢語+する、漢語+させる」と「英語+する、英語+させる」

6.2.1 はじめに

私が集めたサセル使役文の例の大多数は「漢語+させる」の形のサセル動詞の例である。(これはたまたまの結果かもしれないが)「漢語+させる」とは「完成させる」、「実現させる」などである。和語のサセル動詞の例は少ない。和語のサセル動詞とは「笑わせる」、「読ませる」などである。英語からの外来語に「させる」が付いたものもあった。「スタートさせる」や「アップさせる」などである。

「漢語+させる」の用法にも、5.1で述べた変化が今、起きているようだ。使用頻度の上昇と使用範囲の拡大である。その結果であろうか、私から見て、違和感のある「漢語+させる」の用法もある。無駄な「させる」と呼べるものがある。サセル動詞の乱用であると言って良いくらいだ。

このように、私ならサセル動詞を使わないところでサセル動詞を使っている例が多数ある。例を挙げる。

(6-1) ?(名前)さんが絵を完成させました。

(6-2) (名前)さんが絵を完成しました

(6-1)は1990年代の後半か2000年頃に、NHK テレビの番組で聞いた文に基づいている。イギリスの海岸沿いの町に住んでいる、或る女性が何かを完成

第7章 「楽しむ」：意味の変化の例

7.1 はじめに

本書は現代の日本語で起こっている変化を扱っている。第1章から第3章でラレル受動文を、第4章でテアル受動文を、第5章と第6章でサセル使役文を見た。これらの章では文法における変化を見た。現代の日本語では、文法の面だけでなく、意味の面でも変化が多数起こっている。本章では動詞「楽しむ」を見る。「楽しむ」に意味の面で三つの変化が起こっているようだ。三つの変化のうち、一つは文法に関係がある。人称に関することである。意味の点だけでも、三つの変化が同時の起こっているらしいことは興味深い。「楽しむ」は現代の日本語で、私が最も注目している語の一つである。

7.2 人称について

まず、人称についておさらいをしよう。学校で英語を習った時に、代名詞の人称と数ということを習った。表7-1に示す。

表 7-1 英語の代名詞の人称と数

人称	1 人称	2 人称	3 人称
単数	I	you	he, she, it
複数	we	you	they

英語の代名詞を日本語に訳せば、「私」、「あなた」、「彼」、「彼女」などとなる。日本語のこれらの語を代名詞と呼ぶ人がいる。しかし、英語などと比べて、日本語では、代名詞という品詞を立てる根拠は弱いと思う。日本語のこれらの言葉は代名詞とはしないで、名詞の一種と見ることも妥当である。

世界のかなりの数の言語で、動詞は主語の人称と数に応じて活用する。私は欧州の言語の中で、英語の他に、ドイツ語、ロシア語、フランス語などを少し勉強した。これらの言語では、動詞は主語の人称と数に応じて活用する。英語では人称と数による活用は殆ど無くなったが、be 動詞には少し残っている。